



財団法人資源探査用観測システム・宇宙環境利用研究開発機構 沿革

(JAROS : Japan Resources Observation System and Space Utilization Organization)

- 昭和 61 年 11 月 資源探査用観測システムの研究開発・調査および普及啓発を行うことによる宇宙機器の技術の進展、資源の安定供給の確保への貢献によって我が国経済の発展と国際社会への貢献に寄与することを目的として、通商産業省ならびに科学技術庁の許可のもと、「資源探査用観測システム研究開発機構 (JAROS)」という名称で設立した。
- 平成元年 1 月 地球温暖化問題の解決に貢献するため温室効果気体観測システムの研究開発を事業目的に追加した。
- 平成 4 年 2 月 「地球資源衛星 1 号 (ふよう 1 号)」 (JERS-1) に搭載した合成開口レーダおよび光学センサが、宇宙開発事業団により種子島宇宙センターから H-I ロケットにより打ち上げられ、数多くのユーザの方に対して設計寿命を遙かに越える長期に亘り、地球観測に必要なデータを提供し続け、平成 10 年、衛星本体の寿命により、惜しまれつつその役目を終えた。
- 平成 8 年 8 月 「地球観測プラットフォーム技術衛星 (みどり)」 (ADEOS) に搭載された「温室効果気体センサ」 (IMG) が H-II ロケットにより打ち上げられ、数々の貴重なデータをもたらしたが、衛星側の設計寿命前不具合により運用を断念した。しかしながら、短期間ではありますが蓄積されたデータは現在でも研究者の間で高い評価を受けている。
- 平成 11 年 12 月 JERS-1 の光学センサ後継機として開発した「資源探査用将来型センサ」 (ASTER) が米国航空宇宙局 (NASA) 開発の「極軌道プラットフォーム」 (EOS-AM1/Terra) により打ち上げられ、平成 16 年 12 月に目標とした 5 年間の設計寿命を達成したが、打上げ後 10 年を迎えた現在もミッションを遂行中である。
- 平成 18 年 1 月 JERS-1 の合成開口レーダセンサの後継機として開発してきました「次世代合成開口レーダ」 (PALSAR) を搭載した「陸域観測技術衛星 (だいち)」 (ALOS) が、H-IIA ロケットにより種子島宇宙センターから打ち上げられ、貴重な観測データを送ってきた。平成 23 年 5 月衛星側不具合により運用を停止した。
- 平成 18 年 4 月 (財) 宇宙環境利用推進センターの事業の一部を引き継ぎ、微小重力等宇宙環境の物理的特性を利用する宇宙環境利用事業が追加され、名称を「資源探査用観測システム・宇宙環境利用研究開発機構」 (英語略称は JAROS のまま) と変更した。
- 平成 19 年 6 月 ASTER 後継センサとして、高性能ハイパースペクトルセンサ等 (HISUI) の研究開発を開始した。



平成 24 年 3 月

機械振興会館（港区芝公園 3-5-8）に移転。 宇宙システム開発利用推進
機構の発足（3/30）

（無人宇宙実験システム研究開発機構及び資源探査用観測システム・資源・環
境観測解析センターと統合合併）